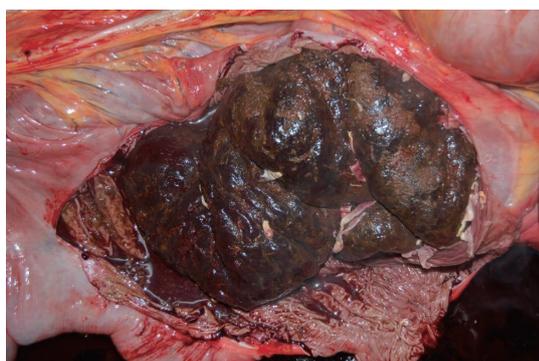


## 葉状条虫を駆虫せねば

静内診療所 井上 哲

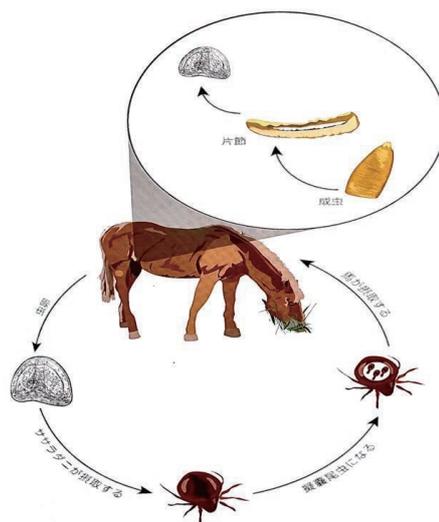
年々暑さが増しているように感じる夏、この記事が軽協便りに載るころには涼しくなっていることでしょう。世間では、熊や鹿の出没が増えているというニュースをよく耳にしますが、個人的には育成馬の盲腸重積に立て続けに2例遭遇した先生がいらっしゃったことに驚いております。馬の盲腸重積は疝痛馬全体の2%以下とも1%以下とも報告されているほどまれな病気で、昔から葉状条虫寄生が原因の一つと考えられてきました。この寄生虫の濃厚感染が馬に影響を及ぼす代表的な病気として、前述した盲腸や回盲部の重積症が挙げられ、慢性的な疝痛症状が特徴とされます。これら疾患は発症すると内科治療に反応することは珍しく開腹手術の適応となることがほとんどです。しかし、葉状条虫を駆虫することで予防できると考えます。



腹側結腸切開後に中から現れた盲腸粘膜と葉状条虫

それでは具体的に何をいつごろやるかです。近年、薬剤耐性寄生虫の出現により、統一的な駆虫プログラムから濃厚感染した馬だけをターゲットに駆虫する考え方が浸透する中で、葉状条虫についても虫卵検査の結果を踏まえ駆虫を行うのが理想です。しかし厄介なことに葉状条虫卵の検出感度は低く、卵が観察されないからといって感染して

いないとは言い切れない事情があります。そのため無作為に選ばれた数頭を検査することにより郡単位の感染状況を推測するか、駆虫後に虫卵検査をすることで汚染状況を把握しているのが現状です。また、経験的に葉状条虫が関係していると思われる馬の疝痛は秋から冬(初春)に多い傾向にあり、これは放牧中の馬が牧草を食むと同時に中間宿主であるササラダニを摂取することで感染が成立するサイクルに関連付けられます。



葉状条虫の生活環『馬の寄生虫対策ハンドブック』より引用

幸いにも我が国における葉状条虫に対する薬剤耐性は回虫ほど深刻ではありません。したがって、当歳馬を含むすべての馬を対象にプラジカンテル製剤による駆虫を秋(晩夏)に行うことで葉状条虫が原因とされる疝痛を予防できると考えます。追伸: 犬に付着するダニの数が増えていると感じるのは私だけでしょうか…。